野蛮と洗練
加守田章二の陶芸

「曲線文扁壺」1970 年
岐阜県現代陶芸美術館蔵

公益財団法人菊池美術財団
菊池寛実記念 智美術館
東京都港区虎ノ門 4-1-35
Tel.03-5733-5131 www.musee-tomo.or.jp

プレスプレビューのご案内は 10 頁をご覧ください。

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、私ども菊池寛実記念 智美術館の活動にご理解とご協力を賜り、誠に有難うございます。

さて、このたび、当館では、2019 年 4 月 13 日から 7 月 21 日の会期で、**「野蛮と洗練　加守田章二の陶芸」展**を開催いたします。

加守田章二（かもだ・しょうじ／1933～1983）は、20 世紀後半に活躍し、50 歳を目前に亡くなった夭逝の陶芸家です。陶器の形態に造形、文様、質感の関係性を追求し、独自の陶芸表現を切り拓きました。

大阪府岸和田市に生まれた加守田は、京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）で陶芸を学び、1959 年、栃木県益子町に独立します。灰釉作品で注目されるようになると、新たな制作環境を求めて 1969 年に岩手県遠野市へ陶房を移しました。遠野で約 10 年間を過ごした後、晩年の一時期は東京都東久留米市で制作します。

独立後わずか 20 年程であったその作陶期間において、加守田は旺盛な制作意欲で絶えず作風を変容させていきました。しかし、いずれの作品にも、大地の根源的な力を表すような土肌の荒々しさや、造形に見る鋭さと緊張感、そして器体を覆うように描き込まれる文様の密度といった力感が示され、同時に、造形と文様を緊密に連動させる計画性や、陶器の形態に個人の表現を求める意思といった現代作家としての思考を窺うことができます。

本展では、作品が注目されるようになっていく 1960 年代半ばから精力的に制作・発表された 1980 年までの作品 65 点余によって、加守田の短く濃密な作陶人生における制作の変遷と深まりを追うとともに、その魅力をご紹介いたします。（※会期中に一部展示替えをいたします）

つきましては、この展覧会を多くの皆様にお知らせいただき、周知にご協力を賜りますよう謹んでお願い申し上げます。

敬具

■■展覧会概要■■

〇展覧会名　　**「野蛮と洗練　加守田章二の陶芸」展**

〇会期　　**2019 年 4 月 13 日（土）～7 月 21 日（日）**

〇観覧料　　**一般 1,000 円／大学生 800 円／小中高生 500 円**

〇主催　　公益財団法人菊池美術財団、日本経済新聞社

〇会場　　菊池寛実記念 智美術館（〒105-0001 東京都港区虎ノ門 4－1－35　西久保ビル）

〇開館時間　　午前 11 時から午後 6 時まで（入館は午後 5 時 30 分まで）

〇休館日　　毎週月曜日（ただし 4 月 29 日、5 月 6 日、7 月 15 日は開館）、5 月 7 日（火）、5 月 8 日（水）、7 月 16 日（火）

〇展示内容　　1964 年頃から 1980 年までの作品約 65 点。
京都国立近代美術館、愛知県陶磁美術館、益子陶芸美術館、当館コレクションならびに、個人所蔵の作品により構成します。

展覧会に関するお問い合わせ　担当：島崎（☎03-5733-5131/ FAX03-5733-5132）

■■ 加守田章二　制作の軌跡■■

■独立まで～岸和田（大阪府）→京都→日立（茨城県）→益子（栃木県）～

大阪岸和田市に生まれ育った加守田章二（1933～1983）は、京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）工芸科陶磁器専攻に入学し、陶芸を学びます。当時、教授であった富本憲吉（1886～1963）は、「模様から模様をつくらず」という姿勢を貫き、陶芸を立体の芸術として捉えた最初の作家でした。

加守田は 1956 年に卒業し、茨城県日立市にあった日立製作所関連の製陶所・大甕陶苑（おおみかとうえん）に技術員として就職します。その後、日立制作所の派遣研修生として益子の塚本製陶所の研究生となり、1959 年には益子町に登窯を借りて独立します。

1960 年、同じく塚本製陶所の研究生であった細谷昌子と結婚し、初めての作品発表展「加守田章二・細谷昌子　陶器展」（日立商工会館）を開催します。翌年の 1961 年には日本伝統工芸展に鉄釉作品で夫婦揃って入選し、同年、自宅と登窯を備えた陶房を益子町道祖土（さやど）に築きました。

■灰釉作品（益子時代）

初期の制作において、加守田は飴釉、鉄釉などに挑戦していますが、中でも学生時代から取り組んでいた灰釉作品で独自の作風を築きます。

益子の土を轆轤で挽き上げた造形は、口造りが薄く、鋭く、土の立ち上がりに緊張感と力感があり、還元焼成による緑青色の渋い釉調と調和しています。

1966 年に第 13 回日本伝統工芸展に出品した「灰釉鉢」が文化庁の買い上げとなり、その作品を対象として翌年の 1967 年に第 10 回高村光太郎賞を受賞し、注目を集めました。

図 1「灰釉鉢」1967 年
京都国立近代美術館蔵

■炻器から曲線彫文へ（益子から遠野へ）

1966 年に日本橋髙島屋での個展で灰釉の集大成といえる作品群を発表した加守田は、翌 1967 年の同会場個展には灰釉作品ではなく、土肌の表情が豊かな土器を連想させる作品を展示します（図 2 は類作）。加守田はこの作品群を「酸化文」と呼びました。

柔らかそうにも見える「酸化文」の土肌は、実際は高火度で焼成されており、作品は硬く焼き締まっています。全体に化粧掛けをした上に釉薬をかけ、それを焼成後に削り剥がしているため、火に直接当たらない素地が見え、独特な表情を作っているのです。この方法は、化粧土ごと釉薬がめくれてしまった失敗にヒントを得て生み出されたといいます。

図 2「炻壺」1968 年
菊池寛実記念 智美術館蔵

この土肌を作るために、加守田は焼成前にも土に手を加えています。あらかじめ化粧土を象嵌して白い線を土肌に刻み、また酸化鉄などの呈色剤を塗って色彩に斑（むら）を生じさせることで、土の表情に重厚感をもたらしているのです。自身の手で作り出す土肌であると言えます。

1967 年、東北を旅した加守田は、遠野を訪れました。そして、遠野の風土を気に入り、陶房を

移す準備を始めると同時に、遠野から益子に土を持ち帰り、新たな土での制作を研究します。そして、陶房が完成すると 1969 年に弟子一人を連れて遠野へ移りました。

■曲線彫文（遠野）

図 3「曲線彫文壺」1970 年
菊池寛実記念 智美術館蔵

岩手県遠野市に陶房を移してから初めての発表となったのが 1970 年の日本橋髙島屋での個展です。幾何学的な形態に波状の彫文が施された作品が生み出されました。

底から口元まで器体の凹凸と波文様が連動し、造形と文様に一体感があります。紐づくりで成形された後、竹篦で文様を彫っており、鋭い口造りも特徴的です。土肌は化合物と土を混ぜた液体を塗ったり、化粧土を塗って焼成後にその土を削り剥がしており、酸化文の技法と繋がりますが、造形が複雑になった分、土肌は整えられ洗練されています。

加守田は遠野の土を「悪い土」と言いました。ロクロで挽けないほど石が多く、鉄分は多いし、水は漏る。しかし、耐火度はふつうで、粘りがあり、成形しやすい。加守田はこの土で幾何学形態の造形作品を生み出し、その後、個展ごとに制作を変化させていったのです。

■色彩への飛翔

図 4「彩色扁壺」1972 年
個人蔵

「曲線彫文」を発表した翌年、加守田は一転して色彩のある作風を打ち出しました。以下は、1971 年ギャラリー・手で開催された個展の会場に掲示された文章です。

「飛翔の色
私は矛盾を感じ　抵抗を感じ　内に暗さや重さを秘めながら
軽く明るい飛翔したい欲望がある　そんな気持ちが　私に
色を使わせた」

失透させた赤や緑、白色の釉薬で波模様を器全体に描いて始まった加守田の色彩の作品は、同年開催の次の個展では朱色を基調にして波文の中に鱗のような文様を描き込み器面を覆うといった展開を見せ、その後も展覧会ごとに文様や色調を変化させていきました。鉄分が多い遠野の土は、その上に直接釉薬を塗ると発色が鈍くなってしまうため、下地に白泥を塗った上に彩色していますが、1972 年に発表した作品はより色彩が鮮やかになり、波文の境界線には穴が穿たれ曲線を強調します。

「曲線彫文」にみる土の肌を掘り出すようなこれまでの方法とは異なりますが、失透させた釉薬を細い筆で塗り重ね、色面には筆致の斑（むら）を残して、彩色の作品においても加守田は複雑な土肌を作り出しています。

また、造形と文様の関係性という点においても「曲線彫文」とは異なる試みが為されているようです。曲線彫文では造形の凹凸と文様の抑揚を緊密に連動させていましたが、彩色の作品の中には造形に捻りのあるもの（図 4）があり、その形状と文様のリズムをずらしています。結果的に器の形状を錯覚させるような効果となっており、文様と造形が有機的に絡み合って、一つの立

体を作りあげるようです。

■変化する作風

図 5「壺」1974 年
京都国立近代美術館蔵

図 6「彩色鉢」1974 年
菊池寛実記念 智美術館蔵

図 7「壺」1978 年
京都国立近代美術館蔵

図 8「壺」1980 年
柳澤コレクション

以後、制作の変容は続きます。作品の主な発表機会は年に 2 回の個展となり、日本橋髙島屋と、1971 年まではギャラリー・手（有楽町）、1972 年からは南青山グリーン・ギャラリーで開催されました。

1971 年、72 年に発表された色彩の波文は、73 年には突き刺さるような勢いのある文様に変化し、色彩も茶褐色、灰白色など抑えた調子になります。同年開催の次の個展では灰白色の器体に波状の曲線が平行に刻み込まれるようになり、翌年にはその線刻が網目のパターンをとるようになりました（図 5）。線刻には黄土色や灰青色の釉薬の線も沿わせて描かれていますが、71 年や 72 年の彩色の作品群とは変わって、土のざらついた渋い表情と縁の鋭い造形が融合し重厚感があります。

図 6 は動きのある文様を上絵で描いた作品です。白化粧の地の上にマットな朱色の絵の具を塗っており、塗り残された白線と朱色のコントラストが効いています。この文様はマットな朱色から艶のある青色の釉薬へと展開し、その後は青・黒・黄土・灰色を組み合わせた色彩に変化しました。

1977 年から 1979 年の作品は、釉薬で細い線を描いた文様が表れます。その線は一見すると象嵌のようにも見えますが、青、白、黒色などの短い線を釉薬で描き、規則的に繰り返していくものです。線状に描かれた文様は、やがて図 7 の作品のように器面を覆うようになります。そして、細い縞の色彩の間に境界線が細く刻み込まれるなど文様に立体感や重厚感を創出させていきます。図 7 は、全面が濃淡のある線状の文様で覆われており、色の輝きが乱反射するような錯覚にとらわれます。

そして、1979 年になると、加守田は遠野から離れて、東京都東久留米市で制作する時期をもち、1980 年には半磁土を用いた作品の発表が続きます。図 8 の菱形の作品もその時期の一点です。赤い線で区切った菱形の文様が青・白・黒の釉薬で塗られ、全色彩の質感に変化をつけています。半磁土の滑らかな肌に色彩が鮮やかに映え、遠野の土の上に白泥を塗ってから着彩するのとは異なる釉調を示します。

この後、加守田は体調を崩し、白血病との診断を受けることになります。東京での制作は短期間に終わりますが、次の展開を見据えていたことが窺えます。

■現代作家としての視点

私の陶芸観

私は陶器は大好きです　しかし私の仕事は陶器の本道から完全にはずれています

私の仕事は陶器を作るのではなく陶器を利用しているのです

私の作品は外見は陶器の形をしていますが中身は別のものです

これが私の仕事の方向であり　又私の陶芸個人作家観です

加守田章二

加守田が 1971 年のギャラリー・手で開催した個展会場に残した言葉です。自身の制作について自覚的かつ客観的な制作者であったことが窺えます。現代作家としての視点は、使用する窯や焼成に対しても表れており、益子時代には登窯から灰釉の展開のために穴窯を築き、次いで重油を燃料とする角窯に変わっていきます。そして遠野では灯油燃料の角窯を築き、東京の陶房には電気窯を導入しています。炎の偶然性を拒否するというよりも「不安定なものは使わないようにする。」「焼くまでに、作ったら九割九分勝負のきまった仕事をやりたい」という言葉がインタビュー記事に残っています。

◆没後に開催された回顧展等の展覧会

加守田章二の作品を紹介する展覧会は度々開催されていますが、東京では、2005 年に東京ステーションギャラリー以来、本展は 14 年ぶりの開催となります。

1984 年「加守田章二遺作展」（弥生画廊／東京）
1986 年「岸和田が生んだ陶芸界の鬼才　加守田章二遺作展」（岸和田市立文化会館）
「加守田章二展」（栃木県立美術館）
1987 年「加守田章二展　現代陶芸の美」（東京国立近代美術館工芸館）
1999 年「加守田章二展　20 世紀陶芸の神話　土の生命を求めて」（益子陶芸美術館）
2003 年「加守田章二展　20 世紀陶芸の神話　第 2 章 生命のかたち」（益子陶芸美術館）
2005 年「加守田章二展　20 世紀陶芸界の鬼才」（京都国立近代美術館・朝日新聞社共催/巡回館山口県立萩美術館・浦上記念館、東京ステーションギャラリー、岩手県立美術館、岐阜県陶芸美術館）
「加守田章二展　20 世紀陶芸の神話　第 3 章　飛翔する生命」（益子陶芸美術館）
2016 年「加守田章二と栗木達介展」（敦井美術館／新潟）
2018 年「加守田章二展 京都国立近代美術館所蔵品を中心に」（備前焼ミュージアム/岡山）

◆海外からの注目

2021 年にミネアポリス美術館（アメリカ）で加守田章二展を開催予定。
アメリカ国内に存在する作品で展覧会が構成されます。

◆加守田章二　略年譜◆

1933（S.8）　4 月 16 日大阪府岸和田市に生まれる。
1952（S.27）京都市立美術大学工芸科陶磁器専攻入学。
教授・富本憲吉、助教授・近藤悠三、助手・岩淵重哉の指導を受ける。
1955（S.30）富本憲吉が主催する「第 10 回新匠展」出品、佳作賞受賞。
1956（S.31）京都市立美術大学工芸科陶磁器専攻卒業。
日立製作所に入社し、茨城県日立市にあった日立大甕陶苑（おおみかとうえん）の技術員になる。
1958（S.33）日立大甕陶苑技術員を辞め、日立製作所の派遣研修員として益子の塚本製陶所の研究生となる。
1959（S.34）日立製作所を退社し、塚本製陶所の研究生も辞め、益子町道祖土（さやど）に窯を借りて独立する。
新匠会会友。1962 年に同会会員になる。
1960（S.35）細谷昌子と結婚。最初の作品発表会「加守田章二・細谷昌子　陶器展」（日立商工会館）開催。
1961（S.36）第 8 回「日本伝統工芸展」に夫婦揃って初出品、初入選する（以後、第 9 回、11～13 回入選）。
益子町道祖土に住居と登窯を備えた陶房を築く。
1962（S.37）半地下式の穴窯を自宅敷地内に築く。その後改良、研究を重ねる。
1963（S.38）富本憲吉死去の知らせを受け、京都山科の富本邸での密葬に参列する。
「加守田章二陶器展」（日立商工会館）開催。
1964（S.39）日本工芸会正会員。
1965（S.40）「加守田章二作陶展」（東京交通会館クラフトコーナー／東京・有楽町）開催。
1966（S.41）日本陶磁協会賞受賞。重油を燃料とする半倒炎式角窯を築く。
第 1 回「加守田章二作陶展」（日本橋髙島屋）開催、以後、1967、68、70～74、76、77、79、80 年開催。
第 13 回「日本伝統工芸展」に「灰釉鉢」を出品。
文化庁買い上げとなり、後に東京国立近代美術館に管理換えとなる。
1967（S.42）国立近代美術館京都分館に「灰釉鉢」が買い上げられる。
文化庁に買い上げられた「灰釉鉢」を対象に、第 10 回高村光太郎賞受賞。
日本工芸会の正会員、新匠会会員を辞して、無所属となる。
1968（S.43）窯場建築着工のため遠野へ行く。
1969（S.44）弟子の菊地昭をともない二人で岩手県遠野市の工房に移り、作陶を開始する。

写真提供：益子陶芸美術館

1970（S.45）第 4 回「加守田章二作陶展」（日本橋髙島屋）を開催し、遠野で制作した「曲線彫文」作品 31 点を出品。
1971（S.46）「加守田章二作陶展」（交通会館ギャラリー・手／東京・有楽町）開催。
「現代の陶芸―アメリカ・カナダ・メキシコと日本」展（京都国立近代美術館主催、東京国立近代美術館巡回）招待出品。
1972（S.47）第 1 回「加守田章二作陶展」（南青山グリーン・ギャラリー）開催、以後 1980 年まで毎年開催。
「現代陶芸選抜展」（日本橋三越本店／日本陶磁協会主催）に出品。
1973（S.48）「陶磁器と美術工芸研修」に参加。約 20 日間にわたりヨーロッパを巡る。
1974（S.49）昭和 48 年度第 24 回芸術選奨文部大臣新人賞（美術部門）受賞。
1975（S.50）神奈川県川崎市多摩区生田に下宿を借りる。
1977（S.52）「加守田章二作陶展」（横浜髙島屋）開催。
1979（S.54）東京都東久留米市の画家の家を購入し、庭に電気窯を設置し、アトリエを陶房とする。遠野での作陶をやめ、益子に引き上げ、東久留米市の陶房で作陶に専念する。
1980（S.55）「加守田章二陶芸展」（日本橋髙島屋／日本経済新聞社主催）開催。
「CLAY WORK―やきものから造形へ」展（西武大津店／西武百貨店主催）出品。
1981（S.56）「中・日現代陶芸家作品展」推薦招待出品。
宇都宮国立病院で検査を受け、白血病と診断される。仙台の東北大学附属病院に入院後、栃木県の自治医科大学付属病院に転院。
1982（S.57）自治医科大学附属病院を退院。
1983（S.58）同病院に再入院。2 月 26 日肺炎のため死去、没年 49 歳。

■■展覧会関連行事■■

●学芸員のギャラリートーク

4 月 27 日、5 月 11 日、5 月 25 日、6 月 8 日、7 月 13 日

いずれも土曜日 14 時より

◆特別ギャラリートーク「曲線彫文を観察しよう」

6 月 1 日と 7 月 6 日は担当学芸員が「曲線彫文」作品を中心に解説いたします。

いずれも土曜日 14 時より

●こども鑑賞会

お子様と保護者の方に向けた鑑賞会です。

6 月 22 日（土）14 時から 1 時間程度

定員：10 組、お申込制→Tel.03-5733-5131

年齢：4 歳～小学 6 年生（保護者の方ご同伴のこと）

参加費：こども無料、保護者の方は一般観覧料 1,000 円（当日観覧券をお持ちの場合は無料）

講師：冨田めぐみ氏

（NPO 法人赤ちゃんからのアートフレンドシップ協会代表）

●ナイトミュージアム：軽井沢演劇部による朗読劇

「一千一秒物語」稲垣足穂作

閉館殿展示室を会場に、朗読劇をお楽しみいただきます。

6 月 15 日（土）18 時 30 分開演（開場 18 時 20 分）当館 B 1 展示室にて

出演：軽井沢高原文庫・軽井沢演劇部

［矢代朝子・山本芳樹（Studio Life）・岩﨑大（Studio Life）］

会費：4,000 円（観覧料含む、当日観覧券をお持ちの場合は 3,000 円）

定員：50 名様、お申込制→Tel.03-5733-5131

※お申し込み受付は 4 月 16 日（火）からとなります。

※詳細はお申し込み受付後にお手紙をお送りいたします。

2018 年度開催風景
「太宰治　新釈諸国噺―わたくしのさいかく―」
より

■本展覧会について広報媒体へ掲載、取材をいただく場合、本リリースに紹介されている作品画像をデータでお貸し出しいたします。申込書のご希望の図版に☑を記し、用紙を返信のうえ、お問い合わせください。ご紹介いただく記事、番組内容については、情報確認のため校正の段階で事務局までお知らせください。お貸出しする画像データは本展覧会終了をもって使用期限とさせていただきます。作品の画像を 1 点以上ご掲載の上、本展をご紹介くださる媒体に対し、本展ご招待券を読者プレゼント用に提供いたします。申込書、所定の欄に招待券希望の旨を明記してください。

掲載に関するお問い合わせ先　菊池寛実記念 智美術館（担当：島崎）

TEL.03（5733）5131　　FAX.03（5733）5132　　http://www.musee-tomo.or.jp/

掲載・画像貸出申込書

返信先 FAX：０３－５７３３－５１３２

●貴社基本情報

会社名：	
担当部署：	担当者名：
住所：	
電話・FAX	E-MAIL：

●媒体情報

新聞	媒体名：	
雑誌	発行日：	発売日：
TV	媒体名：	
ラジオ	放送日：	放送時間：
ネット	URL：	

●画像貸出リスト　※キャプションには作者・作品名・制作年・撮影者を必ず入れてください。

希望作品に☑	作品キャプション
□	（表紙）加守田章二「曲線文扁壺」1970 年 岐阜県現代陶芸美術館蔵 高 45.4，横幅 20.5，奥行 16.0 cm （撮影：消忠之）
□	（図 1）加守田章二「灰釉鉢」1967 年 京都国立近代美術館蔵 高 27.5，径 42.0 cm （撮影：消忠之）
□	（図 2）加守田章二「炻壺」1968 年 菊池寛実記念 智美術館蔵 高 35.0，横幅 22.7，奥行 22.7 cm （撮影：消忠之）
□	（図 3）加守田章二「曲線彫文壺」1970 年 菊池寛実記念 智美術館蔵 高 24.0，横幅 25.7，奥行 25.7 cm （撮影：消忠之）
□	（図 4）加守田章二「彩色扁壺」1972 年 個人蔵 高 18.0，横幅 17.0，奥行 10.0 cm （撮影：消忠之）
□	（図 5）加守田章二「壺」1974 年 京都国立近代美術館蔵 高 42.5，横幅 19.4，奥行 15.7 cm （撮影：消忠之）
□	（図 6）加守田章二「彩色鉢」1975 年菊池寛実記念 智美術館蔵 高 5.0，横幅 33.0，奥行 33.0 cm （撮影：消忠之）
□	（図 7）加守田章二「壺」1978 年 京都国立近代美術館蔵 高 29.2，横幅 24.4，奥行 20.2 cm （撮影：消忠之）
□	（図 8）加守田章二「壺」1980 年 柳澤コレクション 高 45.8，横幅 25.0，奥行 17.0 cm （撮影：消忠之）

●読者プレゼント用チケット希望：　□5 組 10 名様　□10 組 20 名様

プレスプレビューのご案内

展覧会の趣旨、作品解説など、内覧会に先立ちましてプレスの皆様にご説明申し上げます。
ご多用のなか恐縮に存じますが、どうぞご出席くださいますようお願い申し上げます。

菊池寛実記念 智美術館

プレスプレビュー　2019 年 4 月 12 日（金）　14:00 ～

14:00 ～14:45　展示室にて、展覧会のご説明、作品解説などを行います。
展覧会の会場内をご撮影いただけます。

14:45 ～15:00　皆様からのご質問にお答えいたします。

会場： 菊池寛実記念 智美術館　〒105-0001　港区虎ノ門 4-1-35 西久保ビル B1

・日比谷線・神谷町駅出口 4b より徒歩 6 分
・南北線・六本木一丁目駅改札口より徒歩 8 分
・南北線／銀座線・溜池山王駅出口 13 より徒歩 8 分
・銀座線・虎ノ門駅： 出口 3 より徒歩 10 分

ご出席いただける場合は、下記フォームにご記入の上、FAX にて
ご返信下さい。**返信先 FAX　03-5733-5132**

会社名：	
担当部署、氏名	
住所：	
電話：	**FAX：**
Email	